

# ヒカルの指導碁

ひよつとこ齋

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本編北斗杯後、若獅子戦までの一コマ。

そんな約束をしていたよね。

原作への矛盾なし。オチなし。

漫画を読み直してたら書きたくなりました。

あかりにもっとスポットが当たっても良かったような、囲碁中心だからこそ面白かったような。

目次

## ヒカルの指導碁

GW明けの放課後、私が部室に入ると、先輩と同級生が対局しながら北斗杯の話をしていた。

「北斗杯見た？」

「見ました。2勝するって、やっぱり塔矢アキラは凄いですね」

荷物を置いて、挨拶しながら話に混ざる。

「北斗杯って、GWにやっていた団体戦ですよ？」

「ああ、見た？ 塔矢アキラも凄かったけど、俺は進藤ヒカルの方が凄かったと思うぜ」

「進藤？ でも2敗でしょ？」

ムツとして言い返そうとすると、先輩が先に反論した。

「バーカ、結果しか見えてないのかよ。中国戦の追い上げも凄かったけど、それよりやっぱり韓国戦だな。捨て石にされたにも関わらず、高永夏相手に半目差だったんだからな」

「へえ」

酷い！ 勝手なこと言っちゃって！

「先輩、ヒカルは捨て石なんかじゃありません！ ちゃんと実力で大将になったし、勝つ気だったんだから！」

「やっちゃったー！ 大人しくしてて、声を荒げたりなんてしてなかったから、二人だけじゃなく、部室中から注目を集めちゃってる。」

すみませんと謝るより先に、同級生が首をかしげた。

「ヒカル？ もしかして、進藤ヒカルと知り合い？」

「ええ、まあ」

「へー、すげえ。指導碁打ってもらったこととかあるの？」

「頷きながら、そういえば、と記憶を探る。卒業式の時に、暇な時なら教えに来てくれるって言ってたな。」

「もしかしたら、ヒカル連れてこれるかも」

「えっ！ 本当に？」

ザワツと周りが驚愕に包まれる。あれ、そんなに？

と、言った私が驚いていると、先生もキヤーキヤー言いながら混

ざってきた。

「藤崎さん、一応部外者の立ち入りは許可がいるから、日取りが決まったら教えてくれる？ ……絶対にその日は他の用事を入れないようにするから」

先生、本音が漏れてますよ。でも、ヒカルの指導で伸びる人もいるかもしれないし、近いうちに聞いてみよう。

翌日がヒカルの手合いがない日をインターネットで調べて、ヒカルの家に行つてインターフォンを鳴らす。

「あら、あかりちゃんいらっしやい」

「こんばんは。ヒカルいますか？」

「ええ、部屋にいるわよ。ちよつと待ってね。ヒカルー、あかりちゃんよー！」

下からお母さんがヒカルを呼ぶ。おー、と返事が聞こえて、数分待つと降りてきた。

「わり、ちよつと検討中だったから」

「ううん、全然構わないよ。ちよつと相談があるんだけど、いいかな？」

「おう。ついでに一局打っていくか？」

「いいの？ ありがとう」

わーい、久しぶりにヒカルと対局だ。去年の塔矢くんとの対戦前に打ってくれたのが最後だから、半年以上前だ。

置き石を置いて、対局を始める。ゆつくりと落ち着いたら、丁寧な碁。一手を大事に、無理な打ち方をせずに誘導してくれる。

本当に昔とは大違いだ。

「それで、相談って？」

「前にね、高校に指導に来てくれるって言つてたの覚えてる？」

「ああ、卒業式の時な。そういや、そろそろ馴染んだ頃か？」

「うん。それと、北斗杯の話になって、ヒカルと知り合いって言つちやつて。もし行ける日があれば、お願いできるかなあ？」

「知り合い、ね。まあいいか。来週だと、そうだな……」

スケジュールを確認して、行ける日を教えてもらう。指導碁を終えて家に帰り、お風呂でゆつくりと気持ちを落ち着ける。

知り合い。友人。幼なじみ。どれも正しくて、どれも物足りない。もっと押しが強ければ、用事がなくても会いに行けるんだろう。でも、押していつて嫌われたら？ 特に最近、高段者との対局も増えてきて忙しそうだし、煩わしいと思われたら大変だ。

まだまだこれから。囲碁で言うところの布石の段階だと思おう！

ヒカルが来る日。放課後、正門に迎えに行くと、ヒカルが先に着いていた。帰宅部の子がヒカルをチラチラと見ている。

大人っぽいとか、格好いいとか。

同年代だけど大人に混ざって碁を打っているせいか、貫禄出てきてるんだよね。

「ヒカル、ごめん、待った？」

「いや、大丈夫。そんなじゃ行こっか」

こっちだよ、と玄関の方に案内すると、ヒカルがクスツと小さく笑う。

振り返って首をかしげると、とんでもないことを口にした。

「いや、さっきのやりとり。まるで恋人みたいじゃん」

「なっ、えっと、その」

言われてみれば確かに。どうしよう、顔が赤くなる。

「いや、わりい。あ、玄関にいるのは囲碁部の先生？」

「あ、うん。顧問の先生」

ペコリとヒカルが頭を下げて、先生も返す。

先生のところに行つて、簡単な手続きを済ませる。

ヒカルが靴を履き替えるのを見て、私も昇降口に回つて靴を履き替えて、合流する。

そのまま先生について、囲碁部の部室に向かった。

部室に入ると、私以外の6人がすでに揃っていた。

「こんにちは」

ヒカルが声を出すと、キャーッと女子生徒が歓声を上げる。ヒカルがギョツとした顔になる。挨拶で黄色い声が上がるとは。

「こら、落ち着きなさい」

「でも先生、生進藤ヒカルですよ！」

ぎゃいぎゃいと言い合っているのを横目に、ヒカルに声をかける。

「部員は、これで全部。秋にある団体戦に向けて練習中なの」

「ふうん。あかり以外が6人か。3人ずつ、2回にわけて指導碁を打つ感じでいいですか？」

ヒカルが先生に聞くと、頷きつつも何か言いたそうだ。

「先生、どうしました？」

「いえね、もし無理じゃなければ、なんだけどね。私も指導碁を打って欲しいなって」

驚きつつも納得だ。先生もプロに打ってもらおう機会なんて、そうそうないだろうからね。

「いいですよ。じゃあ、ついでにあかりも入る？ 4人ずつで打つよ」

「4人同時に!? そんなの出来るんですか」

部長が驚いた声を上げると、ヒカルが笑って頷く。

さすがはプロ、と感心の声上がるけど、本当に凄いよね。

前半は先生に入ってもらい、後半に私が入る。

先生が三子で、部長が四子。私はいつも通りの数で対局する。

四面が増えても、ヒカルの碁は変わらない。一手ずつ丁寧に、無理のない手。悪手をとがめるといふより正着を教えてくれる。

周りで見ている子たちも、ほおつと感嘆のため息を吐いた。

そうしているうちに終局して、検討に入る。

「ここはちよつと急ぎすぎましたね。先にこつちをとがめておかないと……」

しばらく検討を続けていると、下校時刻になる。若干駆け足で、後半の3人分を終わらせる。

「あかりの分は、帰ってからやる？」

「うん、今は時間が厳しいもんね。後でお願いしていい?」  
「オツケー」

私たちの会話を聞いた同級生が、がっかりといった風に肩を落とした。そんなにヒカルと検討したかったのかな? やっぱりプロって凄いい。

なんか部長が、高嶺の花だから諦めろとか言ってるけど。確かに、ヒカルはそうそう呼べないもんね。

皆ちよつと騒ぎすぎで、先生から怒られるかと思ったら、先生も嬉しそうな顔でヒカルに声をかけている。

先生、そういえばヒカルと塔矢くんのファンって言っていた気がする……。

帰り道、久しぶりにヒカルと一緒に歩く。えへへ、中学時代に戻ったみたい。

「ヒカル、本当に今日はありがとう。皆凄く嬉しそうだったよ」

「うん、それなら良かった。俺もあかりの囲碁部を見られて良かったよ」

他愛のない会話も楽しい。ああ、私、ヒカルが好きなんだなあ。

こんな日が、ずっと続けばいいな。

「今日、このまま家に行つていい?」

「あ、そうだな。日が変わったら、俺はともかくお前、対局内容忘れそうだし」

「もうっ、一日で忘れてりしないよ!」

と言ったは良いものの。翌朝になったら、対局内容はおぼろげになっていた。ヒカルの読みは、正しかったみたい……。